

自主シンポジウム 5

「からだ・表現・かかわり—その可能性をともに育むために—」

企画・司会者 本山益子(岡崎女子短期大学)

話題提供者 西 洋子(東洋英和女学院大学) 鈴木裕子(名古屋柳城短期大学) 吉川京子(金沢大学)

浅井由美(岡崎女子短期大学付属第二早蕨幼稚園) 平野仁美(蒲郡市立みどり保育園)

企画主旨

子どもを取り巻く環境が大きく変わり、子どもの育ちへの危機が叫ばれています。そして、子どものからだやこころが健全に育っていない現状を鑑み、いろいろな領域の専門職に携わる者達が、子どもの人間としての発達を保障するための支援について模索しています。

私達は、「からだどころを柔軟にして、子どもから溢れでるメッセージに向き合うこと。子どもとともに表現する営みのなかで、子どもも保育者も、自らの可能性を育んでいくこと。」(西他, 2003)そんな身体表現活動への思いをずっと温めてきました。そして、このような活動が「保育内容」として、今こそ子ども達に必要だと確信しています。自分の「からだ」で他者や物と「かかわり」、さまざまなイメージや心模様を「からだ」や動きを通して「表現」する活動の場においては、子ども・学生・保育者・研究者などがイメージを共有し、自分の「からだ」で共振しながら、一方向ではなく双方向に人間として育ちあっています。それは身体表現が自分を表すことだけにとどまらず、出会うことで生じる受信・発信のキャッチボールから共振に至る活動だからです。そこで、その身体表現を核として、共振しながら育ちあっている姿を具体的に確認し、その育ちあいが保育の中の生活全般に広がる可能性を探る場をもちたいと企画しました。

シンポジウムでは、身体表現活動を実践している異なる立場から、実践での試みや育ちあいの現状を報告していただきます。まず、身体表現の実践の核となる人材を育てる「養成校」の立場からは、短期大学での保育者養成と、4大の教育学部における幼稚園教諭養成課程の現状を。そして、幼稚園と保育所の「保育現場」からは、子どもの育ちと、保育者の育ちという2つの観点で。さらに、インクルーシブな実践をディレクターという立場からサポートされている「社会的な活動の現場」についてもお話していただきます。そして、広く身体表現活動が、乳児から小学校に至るまでの子どもや、そこにかかわる大人の育ちにとって、どのような可能性をもっているのか。その可能性を導く実践には、今、どのようなことが求められており、そこに介在する問題点は何なのかなどについて、フロアーにご参加くださる皆さんと具体的に検討したいと考えます。

保育者養成における身体表現、ともに育むために

鈴木裕子

“動かないからだ、動かないこころ” この悩みやそれを取り巻く問題の端緒は、子どもばかりでなく、現代の若者たちにも通じています。自らの体験からの体感が希薄な若者たちを、保育者に育てることは殊更に深刻です。保育者という仕事は、言葉の未成熟な子どもを相手に日々の生活の援助を行うのですから、からだを通して子どものこころを受けとめたり、自らのこころをからだで表し伝える豊かなかかわりが、今、強く求められています。ここでは、保育者養成校における「身体表現」の授業実践の紹介を通して、学生の気づきや育ちのプロセスを考えてみたいと思います。身体表現という授業が、保育者のからだを築いていける可能性、さらにそれを保育内容の具体的な実践にどのように関連づけていけばよいのでしょうか。保育者養成校における過密なほどに膨れ上がった授業科目のなかでの位置づけや、表現領域の科目のとらえ方にも関わって考えることができたかと考えています。

教員養成カリキュラムにおける身体表現

吉川京子

からだや動きによる自由な身体表現は、幼稚園教育要領では、保育内容の「表現」領域に、小学校学習指導要領では、体育科の内容の運動領域に、第1・2学年では「基本の運動」領域の中の「表現リズム遊び」に、第3・4・5・6学年では「表現運動」領域に含まれています。平成10年に改訂された小学校学習指導要領では、心と体を一体としてとらえた指導が重要であることが強調され、従前の「体操」領域が「体づくり運動」へと変更され、「体ほぐし」にかかわる内容が新たに示されました。

一方、教育職員免許法、教員免許法施行規則が、平成10年に改正され、「保育内容に関する科目」は「保育内容の指導法」となり、実践力が求められています。

本シンポジウムでは、教員養成課程における幼児の身体表現指導法の授業内容と受講生の気づきについて紹介しながら、からだや動きでかわる身体表現が、教員に求められる資質能力や幼稚園教員に求められる専門性の獲得へと繋がっていく可能性、問題点を探ります。

身体表現を通して自分の育ちを見る

浅井由美

「身体表現」をテーマにした2回の公開保育を経験することで感じられた、私の育ち(変化)をお話したいと思います。

2002年よりリアルなイメージを持って表現させたいと思い、

保育者が主になってテーマを選びました。絵本を読んで、実際に小動物を飼育し、とにかく興味を持てるようにしました。しかし、当日は何とか子ども達をまとめよう、上手に表現するところを見せようとして、子ども達の声を聞いたり動きを十分に認めることができませんでした。表現させることにこだわり、共に感動を味わうことを忘れてしまっていたのです。自分では子どもを見ているつもりでも、子ども達を強引にひっぱり全員そろって体を動かすことにとらわれすぎたと反省しました。

2003年、保育者の取り組みやすい題材を初めに選ぶのではなく、子ども達の様子をじっくり見ることから始めました。どんなことに興味を持っているのか、どんなことを楽しいと感じるのかを探り、普段の子ども達の会話や動きからいろいろなテーマを見つけ、とにかく子どもたちと表現して楽しむことに専念しました。決して自分の思う方向に進んでいなくても、子ども達の声を聞くことや子ども達のユニークな表現を認めることが出来るように努力していきました。子どもたち一人一人は様々な感じ方をし、いろいろな動きでアピールしてきます。保育者がひっぱるのでなく、時には動くことを止めて子どもたちと話し合う場面を持つことが少しずつできるようになりました。「先生、僕こんな風にした！見てみて！」「こんなの考えたよ！」「あー、楽しかった！またやろうね！」「今度どんなことやるの？」と子どもたちが声で体でアピールすることと心を通わせ、身体表現をすることの楽しさをますます実感しています。

身体表現を通しての子どもの育ち

平野仁美

保育士になって30年。ずっと子どもとの身体表現を楽しんでいます。そんな私の実践から子どもの様子をお話します。

【乳児期】個々の発達にそれぞれちがいはありますが、音楽がかかると、自然に多くの子どもたちの身体が動き、にこにこ顔で機嫌がよくなります。音楽やリズムに反応し、手や頭などを動かす様子が見られます。月齢が進むにつれ、自分の身の周りの刺激に反応し、身体をさらに動かして楽しむようになります。散歩に出かけた時、犬や猫に出会い鳴きまねをしたり、動きをよく見て取り込んで来ると、保育室に戻り犬や猫になって動きを楽しんでいます。言葉で言えなくても身体を動かし、そのものになりきって遊ぶことができるようになります。乳児が生活の中で自然に動いて楽しんでいる姿をまるごと受け容れ、保育者は、意識してその動きと一緒にやって楽しんだり、ごっこ遊びにつなげることを、ここでは身体表現遊びと考えることにします。これを通して、①人や物を意識する。②好奇心が高まる。③探索活動が活発になり言葉の取得数も増え、自己主張できる。④身体で共感することができ、色々なことに興味を示し、自分からかかわっていくことができる等が育っていると考えます。

【幼児期】基礎的な運動機能力を身につけ、話し言葉も活

発になり動く楽しさがわかってきます。友だち関係も広がり自分のまわりのことに深くかかわるようになります。個人差はありますが、身体表現をすることで、①心の開放ができ自分らしさが出せる。②言葉かけをよく聞き、考えたり工夫したりする。③友だちの動きを取り込んで、自分の動きに変化をつけることができる。④題材への興味が深まりそのものをよく見る。⑤友だちを認めることができ、ルールのある遊びが楽しめる。⑥友だちの動きに共感して、イメージを共有できる。⑦架空の世界での遊びが楽しめ、気持ちが込められる。⑧他者になる喜びが味わえる。⑨その子自身の夢をふくらませ、豊かな感性が育つ等を、日々実感して楽しんでいます。

みんなが共に表現し・育ちあうフィールドを

西 洋子(『みんなのダンスフィールド』ディレクター)

身体表現活動は、からだや動きで自由な表現を楽しむことで、ひとりひとりの活動者の感性や創造性を育む活動です。また、この活動では、お互いの個性を尊重することで自己と他者との豊かなかわりが生まれていきます。私たちはこのような身体表現の特性を活かすことで、地域社会の中で障害のある子どもとない子どもが共に表現活動を楽しむことができないだろうかと考え、さまざまな試行錯誤を重ねてきました。

1998年に、6名の子どもからはじめた『みんなのダンスフィールド』(Inclusive Field for Dance, <http://homepage2.nifty.com/co-dance/>)には、車いすの子どもや車いすではない子どもがいます。活動をはじめて頃の子どもたちは、障害の有無から生じる様々な差異に大いに戸惑っていましたが、それぞれのからだで自由に表現するプロセスを通して、お互いの身体的個性を認め合いながら独自の新しい表現世界を築いてきました。そしてまた、共に表現する活動を継続することで共感的理解が深まり、強い仲間意識に支えられながら個々の心理的・社会的発達が促されていきました。

現在、このフィールドは、幼児から大学生までの子どもたち、ボランティアの社会人、保護者の方々、そして様々な領域の研究者や教師たち……総勢60名以上のメンバーが集う場となりました。ひとりひとりが自己をみつめつつ、共に表現し・育ちあうことを目指して、また、活動自体が常に地域社会にひらかれたものであることを願いながら、様々な新しい試みに挑戦しています。例えば子育て支援の一環としてワークショップを企画・実施したり、児童館との定期的な交流会を行ったり、インクルーシブな身体活動をテーマとする教員研修会のリーダー役をメンバーみんなで務めたり……。ひとつひとつの機会には、新しい“みんな”との出会いがあり、共に表現し・育ちあう経験はより豊かに広がります。

今回のシンポジウムでは、「みんなのダンスフィールド」の活動の様子をVTRで紹介しながら、身体表現をコアとするインクルーシブな活動の成果や課題をお話したいと思います。